

出光社長の

「道徳とモラルとは完全に違ふ」

を論評し且遁説批判に至る

疋 田 英 肇

日蓮聖人の身延山御入山七百年記念論文として且遁説批判をするつもりで居た所へ、突然学校から、出光興産社長の論叢を手渡され、批判せよとの事であつたので、一読して事の重大性を感じ、急処この論文を提出する。

出光社長の「道徳とモラルとは完全に違ふ」という論叢は、道義地に堕ちた今日の世相を憂うる人士の誰もが首肯する所であろう。その論旨の概要を摘記すれば、出光社長は鈴木大拙老師によつて、「西洋のモラルは、征服者の皇帝、エンペラー、國王が作つた法律、規則を守る事を人民に強逼し、大衆がそれを守る事がモラルであるが、道徳とはお互い平和に仲良く暮らす為に、人間の『真心』から自然に湧き出たもので、書いたものではない」と教えられ、この道徳こそは日本本来のもので、儒教や仏教に教えられたものでなく、無我無私の天皇が愛情を以つて國民に臨まれ、國民が有難うございませと感恩報謝する所に生れ、この道徳の根幹となるものとして、(1)無我無私、(2)互譲互助(3)義理人情、(4)犠牲心、の四つを挙げて説明して居られる。そしてこの道徳こそは世界の行き詰りを救う唯一の道で

あり占領政策によってこわされた「道徳」を復活普及する事が日本青年の将来に期待される所である。出光興産は近代資本主義経営法は採らず、この道徳主義に従って、出勤簿もなく、停年制も敷かず、労働組合もなく、大家族主義によって経営されているから、社員の生活は安定し、出光の七不思議として、世界中各方面からの注目を浴び、研究に来る者さえある。だから我社員はこの道徳主義を世界に弘めて行詰り打開に貢献すべきである。以上が大体の論旨である。

しかし一見甚だ結構な事と思われるこの理論も、その中に多くの破端を蔵していて、やがては、ストーク氏に「核爆発は神である」という結論さえ与えている。「核爆発が神である。」との思想に案外賛成者の多い所に世界平和の危機がある。何故ならその立論には死刑廃止論と同じく自己矛盾、自家撞着を蔵しているからだ。死刑は一見生存権剝奪を合法的に公認している様に見える、然し死刑は殺人という生存権剝奪者に与えられる刑であって、人の生存権を剝奪する者は、当然その人の中の一員である自己の生存権剝奪をも認容している事なのだ。然るに今や、人の生存権は剝奪しても自己の生存権は主張してよいという様な得手勝手な暴論が文明国と言われる国々から起っている。世界的行詰りとはこの様に人間が智的自己矛盾に迷った所から出發している。「絶対的真理はない」と言う思考にもこの矛盾が内蔵されている。何故なら「絶対的真理はない」というその事さえ絶対真理ではない事になるからである。戸田城聖が価値論で「真は無価値である」と立論している事にもこの自家撞着がある、何故なら戸田城聖のこの立論が真であるなら、正にその言葉通りその立論は無価値であり、もし彼の立論が真でないならそれは虚偽である。であるから彼は「私の立論は虚偽か無価値かの何れかである」と自白している様なものだ。この様な世界的思想行詰りを打開する為か、昭和廿九年当時の内閣調査室が「産業政策」を出版する際、宗教問題特に当時隆盛になりつつあった創

価学会批判について、私の口演を筆録出版したいというので、郵政省の渡辺電波局長に録音筆記して貰った。後に、「産業政策」が出版された時、私の口演の字句に誤植が多いのを見て全く驚いた。特に戸田城聖の「真は無価値である」を批難した辺りは「真はむかしである」と誤植されていて、私が最も重点を於て語った所が骨抜きにされた事は今猶忘れ得ぬ痛根事である。私の発音に「ち」と「し」の齟齬があるのではないかと人にも質し、又内閣調査室の中に創価学会員があつて故意に誤植したのではないかと疑ったが、そうではなくてやはり「真は昔だ」と受取り「真」は昔の事で今の時代は真ではないと受取つた様である。その後山梨県家庭教育講座で口演したものの筆記を見せてもらつても同様に肝心な所で誤植されているし、又中心の主題よりも例話や比譬として述べた方便説の方に主点がすりかえられている、現代人の思想的貧弱性には泣かされて来たけれども、どうやら日本人は真理よりも真理から派生した余説の方に興味を抱くらしい、天の岩戸にかくれられた天照大神が、天の鑑女尊ウツクノミコトのストリップ舞踏で真理の扉を開かれた神話時代から、真理の思索よりも、觀光見物という現象の蠱惑に惑わされ易い人種であり、これは小学校時代から修学旅行の名に於て、お寺参りならぬお寺見物をして来た僕から身につけて来たものである。

出光社長がもし唯一絶対主宰者を信ずるキリスト教の宣布をなさるのなら「核爆発は神である」という言辭も成立つてであろう。しかし世界平和の爲にお互が対立鬭争をやめて互譲互助仲良くやつて行こうという道徳が、やがてその結論に於て「核爆発は神である」「地に平和を出さんが爲に我来れりと思ふ勿れ、平和を出さんとは非ず、刃を出さんが爲なり」となつて来る事は、立論の根本にどこか誤りがあつたのではないか、と氣付かれないのであろうか。

この自家撞着の無反省に重大な問題があるのであつて、これは単に出光社長のみが犯されている誤りではなく、明治指導者層のもつ共通な缺点であり、大東亜戦争の敗戦に直面しても、教育勅語復活運動が失敗しても尚且つ反省出

来ない。既に病膏盲に入っているとしか考えられない思考現象であって、私はこれを明治成心的思考と名付ける。

すでに明治成心的思考の上に立てられた道徳論であるから、その道徳の自画自讃はあっても、その道徳の成り立つ道理については無視されている。この事についてはさすが店主に従順な出光店員等も疑問を抱いたであろう、賀岡第七として「道徳と言へば日本では必ず仏教道徳、儒教道徳が思い浮べられる」という尤もな意見に対して出光店主は平然と「日本の道徳が仏教、儒教によって育つて来たという見方は間違っている。皇室が二千数百年にわたって無我無私の姿をとられて、国民に愛情を示されたから国民が有難うございますと恩を知る様になった、それが道徳の根拠だ」と排他的偏見を以って答えられている。従順なる店員は御無理御尤もと引下がったであろうが、その心中には、割り切れない面従腹背の疑いが萌して来る筈だ。道徳という文字が示す様にそれは確かに支那から伝来した言葉であり、儒教、仏教によって培われた筈である。しかるに憶面もなく敢えて日本の道徳が儒教、仏教によって出来たのではないと強言される所に、日本人の抜け切れない排他的思想が流れている。然らばなぜ「道徳」を看板にせずして、「まごころ」をモットーとして掲げられないかと言へば「まごころ」は日本人だけのものでなく人類一般のもつ人間性であるから日本の特性を表わすわけにはゆかない、日本本来のものがないから支那の「道徳」という言葉借りねばならぬのが本音であろう。しかも皇室が「無我無私」の姿をとられたとは「皇位継承闘争」の歴史上の事実は且く措くとしても「無我無私」の思想は明らかに仏教思想である。更に天皇が国民に愛情を示されたと動物本能的現代語で表現されているが、それに有難うございますと恩を知ったのが道徳の根源といわれるけれども、有難うの感謝報恩の念は仏教の教えである。即ち「有り難し」とは「値ひ難し」の訛ったもので「難値」の思想を表わすものとせねば意義はない。

この様に仏教思想によって養われた道徳であり乍ら、敢えて仏教を外來思想として排斥したのが明治指導者等の成心思考である。私は昭和十九年戦争末期の帝國議會を思い出すのだ、折柄拳國一致体制下、精神總動員令が議せられた時、貴族院本會議で、我が國の宗教は我が國本來の惟神カミカミの道で統一さるべきだ。仏教は元來印度の宗教である。聖徳太子の昔には役に立ったが、今ではもう老朽化して役に立たなくなったから元の印度に返せ」と言った様な暴論が堂々と満場一致で可決されんとした時、唯一人わが長井真琴教授が「諸君の主張は丁度、『母親は元來他家から来た人間だ、若い間は役に立ったがもう老耄して役に立たなくなったから元の里へ帰して了へ、家の方は父親一本で統一すれば充分だ』と言っている様なものではないか」と反論された事は未だに耳に新しい。どうやら「家つき、カー付き、ババー抜き」とは明治指導者の発案である。戦争中私は学徒動員で名古屋陸軍造兵廠に動員され、学生等の勉強の為、日蓮上人御遺文を謄写して拜読させていたが、その中の「異体同心事」の印刷を持ってある将校が私の所へ抗議して来た、「どうも仏教家のやる事は納得が出来ぬ、一億一心であるべき現在『異体同心』とは何事だ。須らく『同体同心』なるべし」と言うのである。日蓮聖人は「同体同心」等という空理空論は唱えられない。現実はこの世の中に同体なるものが一つでもあるであろうか、皆十人十色の差別相の中にある。軍隊の階級制度もここから成立って居るのではないか、階級は違っても心は一つに出来る、これが異体同心なのだ。それともあなたは階級の金筋をとって一兵卒と同じ星だけにならねば同心にはなれぬというのか」と言って追い返したが、これがどうやら反体制思想と受取られたらしく、後に学生達の思想問題として持物等に手入れをされたのは驚いた。明治成心思考者等の蒙昧振りはこんなものではない。弥々八月十五日終戦の詔勅が降るや、工場指導者等の狼狽振りは甚だしく、今まで一度も會議の席に招かれなかった私まで、指導者會議の席に着かされた。工場長は開口一番「終戦の詔勅はラチオで聞いた

通りだけれども、我々は天皇から兵器の製造を命ぜられている。事態が此処に来れば一層兵器は必要である。だから我々は増々兵器の増産に努めねばならぬ」として私の意見を求められた。私は「終戦の詔勅には、武器を棄てて万世の太平の為に努力せよ、と宣せられている以上我々は学校に帰って学徒の本分を竭します」と答えた所、工場長は大いに激昂して「終戦の詔勅は君側の奸の謀略だ、工場長よりも君側の奸の言葉を信ずるのか」と叫び、従卒は抜剣して「我工場の方針は決定しているのだ、これに反する者は容赦しないぞ」と威嚇して来た。そこで私は「もし終戦の詔勅が君側の奸の謀略なら、宣戦の布告も君側の奸の謀略という事になりますからそんな謀略にこれ以上乗せられる気持はありません」と席を立って出て行つた。その後工場は騒擾に荒れて、多くの死傷を出したと聞いたが、我々は全員無事学校へ引上げる事が出来た。戦争は一将功ならずして、万卒枯れずに、民主主義に衣更えされたが、大切な思想薄弱、明治成心的思考は改められなかつたどころか、益々その増上慢ぶりは、拍車をかけられ、エコノミックアニマル、エロチックアニマルと動物界畜生道へと後退して行つた。しかもこの頹廢後退ぶりを文化的進歩と錯覚する所に、明治成心的思考の重大なる誤りがある事を、見究め様としない所に、増上慢の危険性がある。

終戦直後の東久邇宮内閣で一億総懺悔が発令されたけれども、そもそも懺悔等という言葉さえ真実には理解されないエコノミック、アニマル等は、直ちにソッポを向いて、懺悔は軍部指導者等がすればよいのだ、我々には戦争責任はないのだと、思想薄弱性増上慢化は一層高まり、軍人に更って文化人と名乗るアニマル等がマスコミという武器で荒し廻っているのが戦後の現状だ。

出光社長は、道徳は占領政策によってこわされたと言われ、一応尤もらしく聞えるこの言葉には賛成者も多いだろう。だが私はここに重大な誤りを見るのである。願て他を言うよりも、明治成心的思考が如何に道徳を乱して来た

か、すでに前述した通りであるが、更に私の体験から一層明瞭にしたい。

先年私はアメリカのカリフォルニア大学で東洋学を学んでいるシャーリー、ヤングという婦人が遙々、身延山の信行道場に入行して来たのを指導した事がある。英語から永い間離れて居た私に果してこの大役が果せるかどうか、自分乍ら危ぶまれたけれども、他に人がないとすれば止む事を得ず引き受けたが、私の杞憂する所はすぐに耐れて行った。それは彼女が明治成心の日本人よりも、余程仏教精神に対する理解力が豊富であったからである。先第一に何故信行道場に入る氣になったかという私の質問に対し、彼女は「私はカリフォルニア大学の大学院で東洋学を学んでいる者であるが、卒業したら、保母になるつもりだ、西洋の子供達は可哀想です。これは貴男達には判らないかも知れない、ほんとうに子供達を立派に人間に育ててやるには、日本仏教精神を学ばねばならぬと信じたが、日本仏教は唯学ぶだけでは体得出来ぬので、信行道場で修行して体得するつもりで来たのだ」と答えた、西洋の子供達が可哀想というのは、私の小さな学識ではキリスト教の反科学的教育の事を言うのかと思ひ又アダムとイヴの原罪の事かとも考えていたがそうではなくて、西洋の動物的愛情の事であり、愛によって愛を生じ、愛によって苦しみを生じ、愛によって憎しみを生ずと説く、仏教の「愛は煩惱なり」という事であった、出光社長が「天皇が国民に対して愛情を示されたから、国民が有難うございますと恩を知る様になった」等という言葉が如何に仏教に対して無智であり、それがやがて今日の親子断絶の業報となつて現われている事等には無干心である様だ。キッスや抱擁に愛情を托する犬や猫はやがて奪い合い、殺し合うのである。その事実はもう日本に現われて居る、パパ、ママ、チーチーパッパの愛の巢にもだえている明治成心思考者の子孫は、この断絶を心理学的研究や教育学的政策によって救わんと、マスコミ、文化人を総動員して足掻いているけれども、あがけばあがく程この愛が増すのは何故か、出発点において既に仏性を

否定し、慈悲心を忘れ、親心を喪失している者等に解決のあろう筈はない。出光社長がここに気付いて居れば「道徳とモラルとは違う」という隠居仕事よりも「慈悲とラウとは違う」という現代的問題に取っ組まれるべきであった。

さすが先進国の家庭に悩みを発見しているシャーリーヤングさんには先を超された感がなきにしもあらず、日本の家庭が仏教道徳によって養われて来た事についてはさしたる説明は要らなかつた。食事について実際上色々な不満はあるだろうと考えたがこれ又杞憂であつた。西洋のパンは神様から頂く物として感謝されるが、日本仏教の「頂きます」は先祖の善根の果報である料理を頂く、感恩報謝の言葉である。だから彼女は「西洋の食事はナイフとフォークの動物的食事であります。私は日本料理、特に味噌汁、豆腐、油揚げが好きですから、こんな美味しい料理が毎日食べられるとはすばらしいです。」私は失礼とは思つたが便所について不満はないかと聞いた。「オー、ノー、日本の便所は清潔です、西洋の腰掛便所は不潔です。唯不満というなら、坐る事を強要される事です。アメリカ人でも、お茶やお花をやっている人は正座出来ます。本来西洋でも神様に祈る時はニールタウンするのですから、礼拝するにはニールタウンするのがほんとしてしょう。だが世界中のあらゆる人種でニールタウン出来るのは日本人だけです。日本人は祈る時だけでなく、食事するにも挨拶するにも皆正座しますから西洋人の様に土足生活をしません。日本人が家庭を清潔にして豊生活をしているのはすばらしい事だと思ひます。家庭も道路も同じ土足生活の西洋人には家庭生活がありません。仏教精神はここに表われて居ると思ひます。唯信行道場で私室に御経本を置く机がないのは残念です皆さんは御経を平気でフロアーに置きますがあれでよいのでしょうか」と不満を漏らした。早速道場に申し込んでおいたが仲々実現せず、ついに出行の際憤懣を漏らして行つた。善につけ悪につけ彼等の信仰は真面目である。従軍軍人であつたプラボーも又信行道場に入ったが、信行道場で牛乳を飲まさないのは小乗的で、釈尊の大乗戒に悖るもの

だと一歩も譲らなかつた。

この様に西洋人に注目されている日本のよい所は、皆仏教精神に養われて来たものだ、華道、茶道、柔道、相撲等日本のよい所は皆外国にとられ、明治人はシャーリーヤングさんが不潔だときめつけている、西洋住宅をあたかも文化住宅の如く取り入れ、動物生活だと非難する土足生活を、さもや文化生活であるかの如く錯覚し、「お父さん、お母さん」と人権の尊重を親から修得して来た尊い家庭生活を、上一人より下方民に至るまで旧弊として捨てたのが、明治成心的思考である。

明治大帝も歴代天皇の慣習に従って出家をなさっていたのに、当時の明治政権は、王権神授説の信奉者である西歐諸國の皇帝に真似させて選俗せしめ、法衣を剃いで軍服を着せ、数珠をすてさせて劔を握らせ、大元帥陛下と祭り立て、日本軍国主義はここから始まり、大東亜戦争に終るのであるが、この排仏毀釈の悪業の報いは終る事なく、今や家庭の崩壊にまで迫りつつある、しかし永年培われた、人情の美しさ、淨らかさは仏教信仰と共に残っている。そこで、ストーク氏が「美学は日本にあるすべてのものと考えてよいか」という第一質問になっている。ここまで読んだ時、私はさすがわざわざ日本まで研究に来る人だと感心し、この答えには少しでも仏教文化の美が交わるであろうと期待したにも拘らず、出光社長の答えは、ストーク氏の言葉の様に、モラルと道徳は違う事、国際連合の行詰りは、モラルの行詰りである事、核爆発は神様であるという見方、の三つであって、ついに仏教の美については語られていない。以上纏りのない論述をして来たので、ここで一応出光社長の所論を纏めて批判すると、出光社長はモラルと道徳とはその成立ちに於て全々違っている、モラルは征服者の統治法として出たものであるから今や行詰りを生じている。この行詰りを打開するには日本の道徳を世界に弘める事だ、とここまでは賛成であるが、その道徳は日本本来の者で

儒教や仏教の育てた者ではないと言われる点に到っては、全く賛成出来ず、その様な無反省な増上慢な考え方を明治成心的思考として攻撃して来たのである。ここで特に明治と強調したのは、出光社長が明治人であるからではない。私も又明治人であるから明治人としての長所短所は自ら体験する所であるが、明治人程身蝕屑な考え方をする者は他の時代にはない、と思う。ヒットラーのドイツ至上主義と同じく、日本至上主義に走り、終に第二次世界大戦に破れた。天皇制のないドイツには再び至上主義は出ないであろうが、天皇制を温存する日本では又天皇を祭り上げて至上主義的動乱を起す可能性は強い、だから「教育勅語」の復活によって道義の再建を謀っても、すぐ軍国主義再建に繋がって行くのだ、「教育勅語」に説かれる道義の問題よりも、それが成立した時代の、軍国主義、帝國主義が問題であり、しかも明治人が今尚、軍国主義、帝國主義の犯した罪を反省し懺悔していない事になる。帝國主義戦争の敗戦は天皇の人間宣言でどうやら治っているけれども、次の日本至上主義が敗戦に終わったら、天皇に動物宣言をさせればよいのか、出光社長の道徳に、日本至上主義の臭気紛々たるが故に、明治人に缺けている大いなる反省を促す次第である。もしこの反省なくして依然日本至上主義的な道徳宣布をするなら、それはもう道徳ではなくて、出光社長が行詰りを宣しているモラルと何等変る所はないであろう。何故ならモラルは征服者帝王が被征服者に守らしたものと云われる以上、道徳も又日本至上主義者が被征服者に守らしたものとなるからであり、特に核爆発は神様であるという威嚇までついている。

この様な言葉は明治人の「排仏毀釈」以後、仏教を棄て、「はとけごころ 仏心」「おやごころ 親心」を棄て、「義理、人情」を棄て、人間の心を物に換算してしか考えない様になったドライな心の持主にしか発せられない言辞である。鈴木大拙老師が、道徳とは「書いたものではない」と言われた含蓄ある言葉さえも理解出来ないのか。「義理、人情」等という人間性が

「権利、義務」という法制に書き換えられたモラルの欠点を明示して居られるのだ。出光社長も道徳の根幹となるものとして、「義理、人情」を挙げておいでになり、たしかに日本人は、この「義理、人情」によって、近世の大家族主義を形成して来た。「廢仏毀釈」後、人間の心と心との繋りが、西洋の思想の「権利・義務」の關係におきかえられてから「人情の美しさ」は次第に薄れ、やがてドライな「情なき」ものになって行く、そしてその移り行きは非常に早いのである。例えば「淀号」ハイジャック事件の時は、人質の中から女、子供や病人等は除外されて、「鬼の目にも涙」で、まだ日本人らしい人情が彼等にもあるかと、多少の慰めを得られたけれども、テレアピブ空港事件でも早「人情」の片鱗だにもうかがえなくなつて了つた。彼等には人間精神というものはない、人間とは細胞組織の物で、機関銃の標的にすぎないのである。この様な学生を作り上げたのは現代教育の缺陷であると識者は言うであらうが、この精神教育無視は明治成心思考に始まり戦時教育に於て益々強められた。一般人は戦争中こそ精神教育が強調されたと考えるだろう、すでにその考えの中に精神に対する無智がある。戦争中精神教育が無視された事は、小学校国定読本の中からお伽話に類する物語りが取除かれた事、就中「花咲爺さん」の抹消された事は如実に精神教育無視の証在である。枯木に灰を播いて花を咲かせる等という事は非科学的だという猪口才な成心思考である。私に言わせしめれば、枯木に灰を播いて花を咲かせる意欲こそが科学精神である。この精神軽視の教育が戦後一層顕著となり、学校の教科書もダーウインの唯物的進化論一色に彩られ、人間は生存競争の最優勝者であり、類人猿から派生した最高動物であると子供の時から教えられているから、今の日本人は皆人面獣身である。

この様に人間を動物の一種と教え込んだ学者に「成程その通りだ、君も動物の一種だから、ホモ、サピエンスの標本として動物園に入って貰おう」と要求すれば、必ずや「僕は動物ではない、人權を蹂躪するな」と怒るに違いな

い。今日の学者は自らは動物でないと主張し乍ら、口と筆では人間を動物だと、心にもない嘘をついて世を惑わす嘘付きだと言える、その様な動物教育を受けた若者等が革命を口実に闘争殺戮を平然と行う様になって行くのも当然だ。若者ばかりではない、学者等自身もその唯物的進化論の結論として原子爆弾製造の肯定論者であり、しかも彼等は他人を殺戮する核爆発は肯定しても、自らが殺戮される事は人権蹂躪であるから、事原爆に関すると途端に人間精神を強調し、今更人間精神の等閑視を嘆かざるを得ない因果応報を身に受けるのである。しかもこの因果応報の道理を教示する仏教の深理に耳を傾ける者はなく、デモによって原爆を禁止しようとしている、宛も竹槍で空襲を撃退しようとした大東亜戦争末期と同じ愚を繰返している。

残念な事には無反省な人間は、竹槍が空襲にかなわない事を以て、精神力が物質力にかなわない証拠の様に錯覚するのだ。その核爆発も空襲も人間の精神が高度に発達して産んだものであり、それを防ぐ竹槍やデモは動物界まで退化した人間の幼稚な所作である、月世界まで探検出来る宇宙船を持つ人間に、原爆撃滅の智慧が出ない筈はない。唯人間が目には目を歯には歯をと言った対立抗争しか、考えつかない動物的愚痴しか持たないからである。仏教の因果応報の教理から言うならば殺人器として作られた原爆は同時に自らをも殺害する兇器である。だから立派な人間精神を持つ科学者は、竹槍デモをする閑に原爆製造者を自滅に導く方法を研究するであろう、原爆を神様とする迷信は、唯一絶対主宰者を妄信する迷信に通ずるのであり、仏教の仏が無作無為の境界で信じられる所以は此処にある。

真の知は己れの無智を反省する所に発し、真の善は己れの悪を反省する所から生れる、法華懺法会が年の元旦、月の朔日、日の朝に行われるのはここにその意義があり、明治成心者等には、儒教の教によって、三度反省する事は出来て、仏道によって懺悔発願する事は出来なくなっている。法華経の行者、日蓮上人に対する明治の誤解もここか

ら出発している。法華經の行者日蓮聖人程反省懺悔をなさった方はあまりないのに、明治人等は鎌倉期の折伏一点張りの日蓮聖人しか知らずして、日蓮聖人の血身泥ちみどろな懺悔を知らない、日蓮聖人が自ら「日蓮は旃陀羅が子なり」と言われた言葉を文字通りに受取って、日蓮聖人に対して悪口雑言をついたのも明治人である。勿論悪口のつき始めは、平田篤胤の「出定笑話」であつたろうが、その悪口を材料として騒ぎ立てたのは明治成心者である、旃陀羅とは勿論屠殺者である、漁師の子であつた日蓮上人は絶えず我が身を反省して「魚鳥を混丸して赤白の二滯となせる身は畜身なり」と言われている。この意味に於ては、上一人より下万民に到るまで一人として畜身でないものはなく皆旃陀羅が子である筈である。しかし前述せる通り誰一人として自らが動物である事を背んじないのは、肉体は確かに動物であっても心は尊い仏性であるからである。「その中に一つの識神を宿す」から梵天帝釈なお恐ろしとせざる信念が生れるのであり、人權尊重はこの反省なしにはその根拠を失うであらう。だから仏教信仰のない明治人の人權尊重は空理空論で、実は動物權尊重なのである。この識神こそ「本有の仏性」であり、出光社長の言わんとする「真心」でなくてはならぬ。幸にも、出光社長は「真心」にお氣付きではあつたが、残念乍ら単に道德の根源としてしか考えて居られない。それは到底明治成心思考では計り知れない本来尊重なるものである。人間も動物の一種と考える彼等は、現代心理学を以て「心」の研究だとしている。然し現代心理学は、言わば心理現象学であつて、人間の心理現象も、動物の心理現象も同じ心理現象だと考え、人間の心理で動物の心理を推察し、動物の心理で人間の心理を憶測する実験觀察の科学である。コント以後実証主義に重きがおかれた自然科学万能の時代に、実験觀察出来ない「心」等実証出来る筈はないので「心」の問題は依然形而上学の問題として考えられて来た。あえて「心の本質」を把握しなれば、深層心理学とか超心理学或は神靈学となり神秘的なものとなつて行く。「心の神秘の扉」は外からは開かれな

い。閉された「神秘の扉」は内から開かれねばならぬ、即ち内開けられて始めて「心の真相」は明らかにになる。仏教を棄てた明治人には客観的に觀察する事だけ考えて、反省とか自覚とかいう心の内側の内観は出来なくなっている。内開けられた心は閉ちた心には把握出来ない。内開けられた心は、内開けられた心にはしか受入れられないからである。反省自覚された「真心」は、反省自覚された「真心」にしか共鳴しないのである。唯仏与仏乃能究尽諸法実相とは、この様に内観修行し自覚された仏性が同じく内観修行をした仏性にしか通じない事である。しかるに一切衆生悉有仏性の教理から言えば、凡そ生きとし生ける者は仏性を有するというのであるから、言わば仏性を有する者が生きる者なのだ、即ち生きるとは仏性をもつ事である。極悪非道の悪人にも仏性ありやと問わるるなら、それは仏性が無いのではなく、仏性の自覚がないから仏性を亡失しているのである。序品には「多遊族姓家廢忘不通利」とこの事を説かれている。多遊族姓家とは、右や左にさ迷って煩惱無明にとりつかれ「心」の眞の姿が表われない。反省懺悔とはこの煩惱の雲を払って「心」の眞実の仏性を証す事である。仏性は人間に於ては「親心」に於て最もよく表われる。日蓮上人も「親の子を愛するは菩薩行の一分なり」と説かれている。親が子を受するのは人間だけではない。犬も猫も鳥もすべて親が子を受するは生命保存の動物的本能である。だから日蓮上人も「空飛ぶ鳥、地を走る獸の子を受する事涙せきあえず候」と仰言り、今日の様に子を受する親は畜生にも劣ると言わざるを得ない。日蓮上人は更に「三皇以前は父を知らず、人禽獸に同ず」と説かれ、父を知る様になってからが人間だと判然精神的解釈をしておいでになる。唯物思想者等は「火を用い出してからが人間」「道具を使い出してからが人間」と唯物的解釈しかしていないが、父を知らない中はまだ類人猿と言えるだろう。未婚の母がある今日の雌達は人間でなく猿である。父を知る様になってから、即ち家庭を形成する様になってからが人間だ。だから今日の様に愛の巢を営んで核家族を作ってい

るのは、雌雄同棲の動物生活であって、これを文化生活の様に錯覚するのが明治成心的思考であって、真相は動物への退化である。この様な後向きな生活には「孝」の精神は理解出来ないから「親孝行は封建時代の思想」と平気で放言するのである。日蓮上人は「孝は万徳の始源」と仰言り、いかなる道徳も親孝行を源として始るのだ。「孝は百行の基」とはこの事をいうのである。出光社長が道徳を強調するに当っても、先づ孝から説かねばならない筈である。然るに敢えて「孝」を説かれないのは「孝は封建時代の思想」という先入観があり、自分の思想が古臭いと批難されることを考える明治成心思考にとらわれているからである。孝とは本来親子の間の道であって、親子の存する限り行われるべき道である。古文によれば孝の字は古老が子に両手をさしのべている姿で、親が子に対する愛育輔導の教えを示し子がこの教えに従う姿である。随って孝とは父母に事うる者、老省に従う。子に従う、子老に承くる也」と説文にあり、人間の生きる道を子に教える親心に対して子が従順して行く事だと説いてある、だから孝とは親子の人間の道徳であって単に「子の親に対する道」ではない「自うた子に教えられる」のも孝である。それが専ら「子の親に対する道」と考えられる様になったのは、封建時代の垂直思考によるので、下なる子が上なる親に絶対服従する事だと考え日蓮上人が最も攻撃される所で、日蓮聖人は「乱臣あって国栄え、賊子あって家興る」と言われ、又「慈父王敵となれば王へ参るが至孝なり」と、妄従的孝や情愛的孝を誠めて居られる、もし親が真理に悖る行動をとるなら、真理の味方になって親を責めるのが孝であるとさえ言って居られる。だから明治人は孝の「真心」を知らずして「孝経」の「身体髮膚これを父母に受く……身を立て道を行い名を後世に挙げ、以て父母を顕わすは孝の終り」という最も明治人向な立身出世主義を孝だと考え、明治時代に浸入した権利義務の觀念に執られて、親の権利で子を芸者に売り、子の義務で売春させた。子を育てるのも資本主義的で、投資のつもりであり、やがて元利合計子供世話になるつもり

であつた。教育ママの心理もこれである。しかしやがてこの投資觀念が見破られるや、彼等は偽善的にも「私は子供
の厄介になる為に子供を育てたのではない」と心にもない放言をし、「親孝行なんてのは封建時代の思想」と批難し
て、現代の断絶を起し、家庭を破壊し、畜生道に陥っている。元來明治人には仏教の「宿業を因とし、父母を縁とし
て人間が生れた」という様な高邁な思想は理解されず、アダムとイヴの子孫である原罪觀や卵子と精子の化合物とい
う様な單純低劣な思想しか受入れられなかつたのであり「頼みもしないのに勝手に生んだ」という子供等の反駁に、
もろくも腰くだけになつたのが現状である。孝が三世に亘る真理であるなら、封建時代に封建時代の孝があつた様に
民主主義時代には民主主義時代の孝がなくてはならぬ、それは、「親の人權を尊重する」のでなくてはならぬ。即ち
仏教の説く因縁所生による人間の親心、仏性を永遠に存続させる事だ、日蓮聖人は、「儒家の孝養は今生に限る、未
來の父母を扶けざれば外家の聖賢は有名無実なり」と教えられているが、未來の父母を扶けるとは、父母の未來を扶
けるといふ極樂往生論ではなく、明らかに未來の父母とは子孫である。未來の父母に孝養の道を教えるのが、眞の孝
道なのだ、この事は又、孝を三の位にわけ、一、衣食を供するを下品とす、唯物的孝行が最も低級な親孝行であり、
二、親の心に背かざるを中品とす、精神的親孝行はも少し高い中程度の位の親孝行であり、三、功德を回向するを上
品となす、最高の親孝行とは、己れのなした親孝行の功德をもつて、親孝行の道を永続せしめる事なのである。

明治の排仏毀釈の悪業が、今や回り回って日本に断絶、親子夫婦相剋、家庭破壊、畜生道転落の業報を齎らして居
るにも抱らず、世界一の隆盛國と錯覚している。この迷いを覺さす事が、道德復活の上の最大急務である。

かく言へば果して仏教家が、道德復活の為に努力しているかと反問されるであらう。残念乍ら、仏教にその様に顕
著な運動はない、去る世界連邦、宗教者會議が身延山で開会されたのも、藤井前学長の「國際正義確立」の悲願であ

った、が然し、日本のみならず、世界が唯物論的転倒をしている今日、中々この主旨は理解されず、ローマ法王のメッセージは、「墮胎が如何に重大な罪であるかを日本人に知らしめよ」と相変わらずの性道徳論で「国際正義」の確立どころか、人間性の定義さえ出来なかったのは残念である。否「正義」の何者か「正義」がどうして出来上るかさえ現代人は唯物論的思索しか出来ないが為に理解出来なくなっている。世界的皮肉屋のバーナード・ショウ翁が「正義が二つあるから世界に戦争が絶えぬ」と嘆いた事は有名であるが、例えば民主主義は一つである様でも、そこに社会共産主義の民主主義と自由資本主義の民主主義の二つが対立抗争を繰返している。各々に我こそは正しい民主主義であると確信をもった対立である。であるから正義が二つある様に見える。しかし民主主義の本質が一つに統一されたり又二つ分れて抗争すべきものであろうか、否、真実の民主主義は無数にあるべきである。世界各国民の抱く民主主義的觀念が一つの統一された民主主義の觀念にまとめ上げられた觀念である。觀念論を棄て去って唯物論の奴隷となつた現代人にはこの間の消息が飲み込めなくなつて了つたのだ。例えばここに「正しい一米」という物を考えて見る。唯物主義者の現代人は実際の一米、一米の物差しをししか考えないであらうが、実際に正しい一米はなくて多少極微量の長短がある筈だ、だから各国に度量衡検定所があり、米原器をそなえて物差しの検査をしている。しかしその米原器が真実に正しい一米であらうか、元来一米とは地球の赤道を四千万分の一等分した長さである。若し唯物主義者が徹底的主張をするなら真実の一米はないと言わねばならぬ。何故なら、実際に赤道に鉢巻きをして四千万の一分に等分したのでもなければ、又実際に山あり海ある赤道で正しい一米を計り出す事は不可能である、だから明らかに一米とは觀念の所産である。この觀念所産の一米の理想こそ「正しい一米」であり、觀念を否定するなら、正しい一米はない。私の言う唯物主義とは、この觀念論を否定する唯物主義で、明治排仏毀釈以後の土壌に処女地を得て雑草の如く

繁り榮えて来た。現代人も残念乍らこの唯物思想の土壤で育てられたのであるから、正しい理論がなされる孝には、唯物的先入観をまづ最初に打破してからでなくてはならぬ。ローマ法王の所謂「性道徳」も本来が唯物的土壤に榮えたキリスト教の所論であり、性教育も、性革命もそれが人間性の「性」ではなくて「セックス」としか考えられない雄雌議論である所に、慨嘆措く与はざるものがある。「セックス」とは元來性別の意味である。精神主義的に見た人間には男女の性別はなく同権の人間である。しかるに唯物的肉体的に見る人間には男女の性別がある。「セックス」の迷いはここから生じ、現代の文明文化は皆この唯物的迷いに落込んでゐる。

残念乍ら仏教もこの唯物的思考に明治以後誤られて来た。仏教の研究も、精神の問題は等閑視され、文献史実によつて実証を得る事に主力を置く科学的研究に重きがおかれた。たしかに科学的には正確な研究方法であるが、その精神的妄点に乗じたのが新興宗教である。例えば文献史実によるならば法華経の成立は西紀後一二世紀となるであろう随つて紀元前数世紀に在世された釈尊の伝説ではないとする大乘非伝説法華経非伝説の主張もなされるであろう。だが法華経の伝承がこの様に単なる文献の上のみ行われたであろうか、法華経の伝承が、単に文字によつて伝承されるものでない事は法華経が序品第一の譬頭から説いてゐる所である。即ち精神の伝達は時間や空間の隔離にさまたげられるものではない。然るが故に天台大師が始めて恵思禪師に法華経を問われた時、「昔、靈山に於て俱に仏法を聴く、宿縁の薰発する所、今又来るか」と器許されて、百千万億那由阿僧祇劫を覚られた。という事は有名であるが、これを精神的伝達と名付け様、文字や文献にしか伝達を認めない唯物思考では理解出来ないであろう、であるから、この精神的伝達を今日に唯物時代に理解せしめるにはイロハから始めねばならないのである。

「イロハ」には精神的な深い意味が蔵されてゐるにかかわらず、我々は単なる符号文字としか考へて居らず、精神

内容を抜きにして伝達されて増々符号化されて行く。我々が朝起きると先第一に発する「お早う」の挨拶は、「お互に朝早くから御苦労ですわね」の慰撫の心情の発露であったが、やがて機械化されて一つの音波として録音機に吹込まれ、鸚鵡や九官鳥に記憶されて、再放送された場合、もしそれが九官鳥の声であったとしたら、その音波に単なる動物の声として人間性は感じないであろうが、機械化されて拡声機やラヂオ、テレビで放送されればその音波に人間性がある如く錯覚する。この錯覚に乗じて暴力を恣にしているのがマスコミである。即ち人間精神は音波や文字によって伝達されるであろうが、逆に音波や文字が人間精神を伝えるのではない事を我々は忘れ易い。日蓮聖人が重大教養を「文底秘沈」と説かれ、「二人三人、座を交えて読む事勿れ」と誠められたのは、人間精神を抜きにした符号文字によって、錯覚する事を憂えられたからである。

然るに物質文明は増々人間精神の機械化を目論み、人間の音声、運動の機械化は言うまでもなく、思考までも符号化し機械化しつつあり、人間はやがてロボット化するであろう、然らばロボットと人間とはどの点で異なるかと言えば人間の機能を悉く具備するロボットは試行錯誤の行動は出来ても、反省自覚する事はないであろう。従って懺悔発願し、創作し、理想を持ち、批判し発心する事は出来ないであろう。いかに緻密に自然科学が発達して、いかに精密な頭脳が製作されても持ち得ないのが人間精神であり、言わば前世以来の体験のすべてを具有するのが人間精神であって、この事を「宿業を因」とすと説き、又一念三千とも説くのである。

この意味で人間精神は「内開けられた心」から「内開けられた心」に伝達されるのであって、言わば主観の客観化の中に行われる。具体的に言えば「我と汝」との中に伝達されるのである。実際的には人間の家庭生活の殆どが精神伝達の修得である。ラフカディオ、ハーンが日本の家庭生活の中にこれを見出して遂に日本帰化を決意したのは有名

である。我々が食事をする時「頂きます」「頂戴します」と唱えるのは仏教の「婦命頂戴」から教えられた言葉であった。それが符号文字化し、マスコミ化されて、既にその精神が忘れられている。我々は先祖伝来、人間の食物は人間が作り料理して来た。キリスト教の信仰の様に神様からの賦与物を拾い食いする動物でもなく、天然自然の食餌を盗み食いする餓鬼ではないのだ、だから食事が終ると「御馳走でした」と言うのは、何も腹一杯になったからこれから馳せ走りましょうというのでない。「この料理の為にどれ程皆様の御奔走を煩はした事でしょう。私もこの御恩報じの為に、馳せ走ります」との発願弘誓の言葉であり、この言葉の中に仏教の要旨が充分にもらわれている。だから凡ゆる宗教が神に犠牲物を供えるけれども仏教のみが先祖に御霊供を供えるのだ。ここに遠い祖先と我々との間に人間精神の伝達が行われて来た。

然るに排仏毀釈以後この尊い精神は忘れられ、専ら訓詁、史実の研究にのみ専念した所に新興教団興隆の余地が生じたのである。

敗戦後「天皇帝」の問題が論議された時、我々は政治機関としての天皇でなく、国体としての天皇を考えるのだと主張したけれども、国体という精神的な御国柄を表わす言葉は通用せず、国民体育大会の略語としてしか受取れない状態になって了った。全くナンセンスな話である。我々日本人は明治以前には仏教的に天子様、十善の君と考えて来た。この十善の君こそ仏教思想の重大な意味を示すものである。即ち「十善の君」とは十善根の果報を受けられたあなただであって、二人称としての「我と汝」との間柄を示す者で、決してヒズマジェステイという第三者的呼称ではなかったのであるが、排仏毀釈と共にヒズマジェステイ天皇陛下となられ、王権神授の神様となったのである。

同じ様な誤謬が身延山にも向けられた。終戦後、私は日蓮宗教師試験委員に任じられ、「祖伝」の講義をする事に

なつて、その綱要を印刷したが、その第一章に「日蓮聖人御出世の意義」と標題をつけた。日蓮聖人の伝記で一番大切な点は、何と言つても末法濁悪の世に東北有縁の地日本に生を享けられたという重大な意義こそ日蓮大聖人の御生涯にとって最も大切な事であるのでこの標題をもうけたのである。然るにこれを見た若い戦中育ちの教授が、「人間の生れる事に意義がある」なんて古い非科学的な考え方が学問の進歩をさまたげているのだと愾面もなく言うのである。特に「日蓮聖人身延御入山の聖意」については、現在面と向つた人の心さえ判らないのに、七百年昔の日蓮聖人の御氣持等判ろう筈はないと言うのである。前述せる如く、内開けられた心に接する内開けられた心には通ずるものがあり、この感応道交を否定すれば、遂に断絶に陥つて了うであらう。

幸にも法華経は開顯の教え、内開けられた仏の教えであるが故に、対する衆生の心が信心によって内開けられれば時代と場所の隔りにかかわらず感応道交する事が出来る。日蓮聖人が内相承を強調される所以はここにある。思想が唯物的になり、理論がソフィステイケートされて、人々の心が断絶化されればされる程、精神的解釈は一層重んじられるだろう。日蓮大聖人御出世の意義も、この精神的解釈を怠り、「人間の生れる事に何の意味があるう」と唯物的解釈だけしてはそれこそナンセンスである。

花が開いて蜜を出す現象を、単に温度が適当に昇り栄養が充分であるなら花は自ら開いてあり余つた糖分を放出するという自然的唯物的見方だけでは自然界の目的論的解釈は出来ないであらう。太陽を単なる熱塊と解して満足するならそれで足りるであらう。しかし太陽がなぜあの様に大なるエネルギー源となつたか、を研究するには必ず目的論的解釈が必要であり、なぜ花が蜜を出すかの研究には目的論的解釈は無視出来ないであらう。精神的解釈の必要性はここにあり。

日蓮大聖人の御入山の聖意について、従来且通説が行われて来たのも、文字通り「しばらく」を短時間の言葉として受取ったからである。

「しばらく」とは果して短時間であろうか、「しばらく」とは唯物的に即事的に時計や曆の上でのみ考えるなら短時間であるが、精神的には長時間を意味する。「しばらくでした」という信書の言葉は明らかに「長らく」の長時間である。恋人同志に「しばらく」が用いられるなら、ほんの二三日でも「しばらく」であろう。それは一日千秋の思ひという言葉で明らかな様に精神的には長く感ずる時間である。

幸に昭和定本に新たに、文永十一年五月十七日付の富木殿御書が加入された。この生々しい御信書によって、御入山の聖意は明らかになった。御信書である事は、この御書に、「この由を御房等にも語りさせ玉え」とあるによって充分明らかである。

まづ端書に「飢渴申すばかりなし、米一合をも売らず餓死しぬべし、この御房たちも皆婦して唯一人候うべし」と言語に絶した饑饉の状態が報ぜられ、いかに山中生活が困難であったか想像される。しかも本文には「未だ定まらずとは雖もこの山中心中[・]にかなえて候へば、しばらくは候はんずらん、結句は一人になって日本国を流浪すべき身にて候。又立ち止まる身ならば見参に入り候へし。」

と御心境が述べ懐されている。この山中心中[・]にかなえて候えばとは、日蓮聖人が内開けた心の中を示されて、氣に入ったと述べ懐されたのだから「しばらくは候はんずらん」は精神的に解釈して、「出来れば長く居たいと思う」と理解されるべきである。従来、衣食住の不自由な身延山だから、しばらくの間は居ても、永い間の安住所と定められたのではない、としばらくを唯物的に解釈したのが且通説であり、それがやがて、身延山は日蓮聖人を苦しめた無間地獄の

山だと俗信の主張となり、反身延の思想となり、最勝の地を富士山に設定して行く富士戒壇論ともなつて来た。最も精神的であるべき宗教家が唯物主義に走つて祖意を誤つて来た事が、いかに重大な結果を齎したかを反省すべく、幸、明治成心思想が如何に仏教を誤つて来たかを、出光社長の道德論に実例をとつて杜撰ではあるが批判して見たのである。